

葉治英哉

狢物見隊顛末

狢物見隊顛末

葉治英哉（はじ・えいさい）

1928年7月、青森県生まれ。青森師範学校本科二年を病気で退学。通信教育にて法政大学文学部卒業。公務員、会社役員を経て現在無職。90年、「戊辰牛方参陣記」で第37回地上文学賞を受賞。94年、「狢物見隊顛末」で第一回松本清張賞を受賞する。八戸市在住。

またぎものみたて
狢物見隊顛末

一九九四年八月十日第一刷

著者 葉治英哉

発行者 阿部達見

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三—二三

電話〓〇三—三二六五—一二二一



102

印刷所 凸版印刷

製本所 中島製本

万一、落丁・乱丁があれば送料当社負担でお取替えいたします。小社営業部宛お送りください。
定価はカバーに表示してあります。

ISBN4-16-314970-8 ©Eisai Hajj 1994
Printed in Japan

狢物見隊顛末／目次

狢物見隊顛末……………5

戊辰牛方參陣記……………77

勝手救援隊始末……………135

第一回松本清張賞選評……………220

装丁
安彦勝博

狽^{またぎ}物見隊顛末

又^{また}物見隊顛末

戊辰戦争が、会津から庄内、北秋田へとなだれて行った慶応四年夏のことである。

羽州街道から逸れて二日目に米代川の支流れの阿仁川を渡った三人は、川岸伝いに阿仁街道を目配せも油断なく阿仁前田に向けて急いだ。主戦場を離れたとは言っても敵国のただ中である。迂闊に村に入れば只事では済まないだろう。道の端に潜んで様子を窺ったが、敵方の侍の姿はまるっきり見えない。人足態の者共は足繁く往き来しているのだが、これまでの戦続きが嘘のような、信じられない静けさが村々を覆っている。

頭の大蔵を先頭に立てた抱の打手の与吉と勢子の多作の三人は、それぞれが手甲脚絆の身拵えをし、犬皮を着込み腰に山刀をぶち込み、狢笠で面を隠しているが目立たない方が不思議な出立ちである。さらに火縄の火口を竹筒に入れて肩から下げ、細い管で息を吹き入れて火種を絶やさないようにするから、どうでもきな臭いにおいが立ち込める。糧食網袋を背に括りつけ、その上に火縄銃を背負う装いは秋田狢も同じなのだが、南部狢とは

どことなしに賄いに違いが出る。

身元が割れて取り囲まれては面倒と、阿仁前田からは起伏の激しい間道の道筋を選んだが、山に遮られて見通しが利かず、三日の間を山中で過した後、荒瀬の本村をかすめ、萱草に辿り着き、すぐに道を西の山岳地帯へ取り直して険しい峠を一つ越した。

峠を下った山ふところに抱かれた目指す根子（秋田・阿仁町）に着いたのは八月の晦日。奥羽狼の元締正治郎の家構えは、冬の雪深さを偲ばせて頑丈な造りの中二階建てである。

三人は門柱の外から案内の声をあげ、地面に膝を折り敷いて神妙に待った。目的の半ばは達成されたも同然と三人は思った。

三人が戦場を抜け出して元締を訪ねたのには内々のいきさつがあった。

彼らが代官所の要請に応じて藩領の鹿角（秋田・鹿角市）に出張り、毛馬内砦官所で秋田攻めの沙汰を頂戴したのは八月の朔。秋田への討入りが始まる僅か八日前である。

「われら十八人は斗内狼物見隊と仰せ出され、頭取兎玉様配下と決った。仕事は先鋒、嚮導物見の者、兼ねて鉄砲打方である」

統領の長五郎が一統の者に告げた。

「南部方副大将向井藏人様、並びに御番頭、御目付様方より直々にお達しがあった」
狼は千年もの昔から固い掟によって他の追隨を許さぬ狩獵集団を形成してきた。

その統領の裁定は常に絶対であつた。

「われら狽は夜目遠目が利く者として指揮所の覚えがめでたい。加えて足腰達者なれば物見には打ってつけ。秋田の山々や道々、村の様子にも精くわし通く、鉄砲打方としては勝れた手練揃いなれば、と申されやんしてな」

つづいて統領がお歴々の考えを披露すると、いかにも、とみなが領き合つた。

末座で丹田に力を込めていた与吉も誇り高い気持をくすぐられて悪い気がしない。

熊いぬず巻狩りには毎春、秋田の山々に遠出してきた。道沿いの村々、町々の隅々まで自分の庭先同様に知り尽している。そういうことで狽に値打ちがあるのは分かつた。

「面倒が起きねばいいが」

巻狩りで二の射場よつばに就く野月のづきの組頭の左太郎が鯉骨えらぼねをさすりながら口を挟んだ。

「秋田方は、秋田狽をばわれら同様に先鋒物見に使うとみるのが当然至極だえ。となれば、秋田狽と鉄砲射てつぱうち合うことになるが、それで、ご始祖様に申し訳が立つのがえ」

口を挟むことは異例なのだが、思慮深げな彼の言葉に一統の中にざわめきが広がつた。「南部方と秋田方が戦うと言つても、戦は侍がやることでやんすだえ。狽が巻添い食うのは、どう考えても普通で無がんすな」

野月から出張つて来た狽達は頭の意見に同調して肩を怒らして座中をねめ回した。次の統領は腕前から判断して、統領と同じ在所、松山の組頭の大蔵と衆目は一致してい

るのだが、腕前だけで決めるのはどういふものか、口も立たねばならぬし気性も激しくなければならぬ、と賢しらげに言う者もいる。

そういう者達を当てにする素振りが、日頃の左太郎の言動からこぼれて見える。

どちらかというとも何も言い出さずにいる温厚な物腰の大蔵を、多少とも最良気味にしてきた負い目も手伝って統領は胸元が詰った。

「戦え、とは言つてねえぞ。ただ、狐の許しを戴いてきた者として、当然、こたびの討入りではお報いしねば、ということだえな」

統領は巻狩りで見せる采配振りには及ばないが、先ずは面目を保つ理由を言つた。

左太郎手を除いた多くの者達は統領の言葉に深く頷き合つたが、左太郎にはそのことが不満だつたらしく続け様に空咳を拵えた。

「狐の世界は別でやんすだ。狐のお許しは、われらが始祖万事万三郎様がお大師様より頂戴してよりこの方千年にもなりやんすだえ。われら狐は特別に人に勝れ、山の神のお使いの熊を打殺ぐ、お許しをば戴いている。殿様とは何の関りもねえ。そうでねどえ皆の衆」
界限きつての物知りと評判の左太郎の言葉には重みがあつた。狐同士が殺し合つてはご始祖様に申し訳が立たないと誰もが思う。

荒瀬村根子の狐元締は奥羽一帯に束ね役だと名が轟いている。機嫌を損ねては秋田での生業が成り立たなくなる道理である。

簡単に事は運びそうにない雲行きとなった。これが熊巻狩りならば至って簡明、誰一人理屈をこねる訳に参らぬのだが、こたびは狩りではない。秋田藩へ討入りの戦である。戦が本職でない者に戦の下知は難しい。戦の体験などは誰一人ないのだ。段取りの見当すらつかない。統領の面上に焦りの色が浮いて、しだいに機嫌が悪くなったようである。

「根子の元締に使いの者を出しなせ」

統領の心底を見すかして左太郎が言った。

「何んどえ。根子さ使いば出せどえ？」

三の射場に甘んじている乗上の松五郎が、やっと出番を擱んで話に割り込んだ。赤く茹だった胡坐鼻に組頭の威厳を込めているのだが、左太郎は冷たい眼で黙殺した。

「われら斗内狹一統は、秋田狹衆とは戦は勿論のこと争う気持は少しも持たねえ。こたびはやむなく駆り出されて来あしたども、元締様に逆らうつもりなどさらさら……」

左太郎にみなまで言わせず、先をへぎ取るように松五郎が遮った。

「そつたらご言つて。へば、誰がその役目をば務めるのだ、ん？」

笑いに紛らした口振りに応じて乗上の狹共が下卑た笑いを撒き散らした。

これまでもほころびの兆しが無かった訳ではないが反目し合うことはなかった。これから先の不安が与吉の胸に渦巻いた。

「どうだえ。秋田攻めに加るども秋田狹衆とは争わねえというわれの考えに賛同せえ」

考えが決まらない統領に業を煮やしたのか、左太郎が声を倍にして叫んだ。

統領が二度ばかり奥歯を噛んだ。

「左太郎、いつから統領になったぞ？ 余り出しゃ張るもんでねや。熊巻狩りに来たのじゃないが、狼の掟を忘れた訳じゃあるめえ」

統領の一喝に遭っても左太郎は動ずる気配も見せずに分厚い胸を反らしていたが、さすがに言い募るのは愚かとみてか黙った。

狩りとは勝手が違つて遠慮があつたのだろう。統領は取つて付けたように、

「だが、折角、左太郎が目論見を披露したことだ。顔は立てねばなるまい。根子の狼元締さ、顔つなぎをつけることにするか」

と、どこか力の籠らない口振りで座を取り繕つた。しかし、配下の者から水を差されたことの無念さがありありと面に表れた言い方である。そのことに与吉は危惧を抱いた。

統領が座を取り繕つたのを潮に、逆に、一統の者達は勝手次第とばかりにしゃべり始めた。話し合いに馴れていない者ばかりが、声高に、かつ、性急に言い立てるから、まるで、たがが外れた桶のように収拾がつかない。掴み掛らんばかりの形相の者も出る始末。それでも、統領はただ黙りこくりに、むしろ、怖れをなした視線をさ迷わせている。

それまで黙っていた大蔵が見兼ねた。

「この役目、引き受ける者はいないのか」

大蔵は温厚だが、並外れた手練である。口から泡を噴いていた者も静かになった。一の射場を任される者は誰からも尊敬される。陰で賢しらげにあげつらう者も黙る。

「そりゃ、言^へり出しっぺの左太郎の役せ」

松五郎が口を尖らして言った。日頃の憂さ晴らしか、大人げない言い回しである。

「われで良けりゃ何のこともねえどもな。それじゃあ、駄^{わが}目でないのげ？」

左太郎は心得て少しも慌てない。

「たかが野月の組頭の左太郎が出向くんじゃ、ちっと、元締様に失礼であんすべえ」

「お前が失礼だと言うからには、ほかにはまり役の腹づもりがあつてのことか」

大蔵が整った面立ちに釣り合つた言い方で、左太郎の横顔に切れ長な目を当てた。

左太郎が統領に目を向けたようであつた。

統領の顔に慄然とした翳が走つた。

「統領のわれが、使いのはまり役かえ」

青ざめている統領を見据えて左太郎が鼻先に息を抜いたようである。ぞっとする冷徹さを感じさせる振舞いである。

統領は統率者としての力を失つたのではないか、と与吉は思った。

「そいつはいけねえ。統領あつての奴組だえせ。とんでもねえ見だな、左太郎」

松五郎が統領に阿^{おもね}る言葉を言つたが、声の下から狡猾な素顔が浮いたようであつた。

「われは何もそうは言つてねえぞ。あとは言わなくても分かろうと言うものだ」

左太郎はいざという時にいつも言葉濁す。押したり引いたり巧みなのである。

「お役目、われがお引き受けいたす」

名指され同様の大蔵が統領に目礼を送った。これ以上争つても得る物はない。得る物どころか、亀裂が深まって何もかもが失われることだってあろう。そう思ったのだ。

それぞれの在所の頭には他人には知れない競い合いがあるだろうし、大蔵の誇り高い気性を思えばこうなるのが当然かも知れないが、大蔵一家から目を掛けて貰ってきた与吉の胸の裡は揺れた。お役目を失敗り、万に一つ死んだりでもすれば、妻はもとよりのこと、娘のお美代も悲嘆に暮れることになる。まして、お美代は与吉の命だから居た堪れない。

「供の者は、抱の打手の与吉だ。——ついでに、勢子の多作をも連れて行けや」

息を吹き返した統領が裁定を下した。

供を買つて出ようと腹に決めていた与吉は深く息を吸って安堵の胸を撫で下ろした。

その一方で、大蔵に在所の者だけを供につけた統領の気弱さを敏感に嗅ぎ取っていた。

加えて、与吉とお美代の仲を羨んで、性懲りもなく横恋慕してこっぴどく振られ続けたきた多作が、与吉にくっ付いているうちに自分におこぼれが回って来るとでも思つてか、締りのない瓢面で目尻を下げているのが目障りだった。毛が三本足りない面と向かつて